

1960年代，ノッティングヒルにおける ロンドン・フリー・スクールのメディア戦略

—John ‘Hoppy’ Hopkins の「ハプニング」の作り方—

西川 麦子

はじめに

ロンドン・フリー・スクール (London Free School: LFS) とは、ロンドン、ノッティングヒル (North Kensington) において、1966年に若いアーティストや研究者たちが住民に呼びかけた自由な学びの場作りの活動である。1960年代の対抗文化活動の先駆者ジョン・ホプキンズ (John Hopkins, 1937-2015, 通称 ‘Hoppy’)¹⁾ が、ニューヨーク自由大学 (Free University of New York: FUNY) の発想から刺激を受け、従来の教育制度の枠にはまらないフリー・スクールを始めようと友人たちに呼びかけた。当時のノッティングヒルには、国内外からの移民や出身が異なる人々が居住し、ロンドンでも最も貧しい地域の1つであり、劣悪な住宅状況、人種差別、失業、犯罪など社会問題が山積していた。1960年代には、こうした状況を改善しようと、さまざまな思想、目的、立場の個人、組織、団体が、ノッティングヒルに入り、住民と関わりながら、地域に拠点をおいた多様な「新しい」コミュニティ活動を試みた (西川2014b, 2015)。また、多様な文化と安い家賃にひかれて若いアーティストが集まり、独自の創作活動を展開した。

切実な社会問題の改善に取り組む人々と新世代のアーティストたちは、同じ地域のなかにあっても必ずしも接点をもたなかったが、LFSは、多彩な活動によって、人種、出身、立場の異なる地域内外の人々をつなごうとした。ボクシングのヘビー級チャンピオン、モハメッド・アリを子供たちのクラスに招待し、地域のストリート・カーニバルを成功させ、LFSの活動資金を集めるために教会ホールで開催したピンク・フロイドのコンサートが評判となり回を重ねた。しかしながら、LFSの当初の目的であった自由学校は、一部のクラスにしか参加者が集まらず、1966年末には、LFSとしての活動は行われなくなった。

LFSは、わずか1年足らずの短期間の活動ではあつ

たが、イベントの話題性とホプキンズをはじめとした関係者の知名度によって、60年代のアンダーグラウンドの活動として、また、その後、世界的に有名になるノッティングヒル・カーニバルとなる動きのひとつとして、本や雑誌記事のなかで言及されてきた。しかしながら、この論文では、「自由学校の失敗」や地域内外の人々を集めた「イベントの成功」といったLFSの活動の結果や成果だけではなく、理想と情熱をもった若きアーティストたちが地域と関わり活動を展開していくそのプロセスと方法にとくに注目する。LFSが作成、発行した議事録、フライヤー、ポスター、ニューズレターなどの一次資料とLFSの主宰者であるジョン・ホプキンズへのインタビュー (2009年～2014年) をもとに、ホプキンズをはじめLFSの関係者による情報共有や発信の方法をとらえ、当時のアートやコミュニティ活動のひとつの手段としての「ハプニング」がノッティングヒルという地域にどのように仕掛けられ展開したのかを考察する。

なお、1960年代のノッティングヒルについての研究は、筆者が2001年から関わってきたロンドン西部ハマーミスでの地域コミュニティ研究の延長線上にあり (西川2004, 2007, 2009, 2010)、またイギリスでの調査研究からえた問題意識を展開するかたちで、2010年よりアメリカ合衆国におけるコミュニティメディアと地域活動に関する調査研究を行ってきた (西川2012, 2013a, 2013b, 2014a)。これら一連の調査研究をとおして、「人、もの、情報のグローバル化が進行し、大量の情報が氾濫する時代に、場所に拠点をおく活動において、多様な背景をもつ住民たちが、どのようにメディアを利用して他者同士が集う『場』を作り出し、人と人との関係を生み出すのか、その仕組みをとらえ、多様性に開かれた地域作りやつながり方の可能性を探りたい²⁾ (西川2015: 152)。情報収集と発信の「メディア戦略」や、そこから人の動きを作り出す「場の作り方」といった問題は、今日の住民活動、運動作りと共通する課題であり、60年代から現代社会をみる視点と

なり得ると考えている。

地域活動における「場の作り方」という点では、60年代のノッティングヒルについての調査では、3つのタイプのコミュニティ活動に注目している。第1は、「単位としてのコミュニティ」を設定する住民組織作りである。そこでは組織や集団の継続、住民としてのアイデンティティの形成が重要となる。第2は、「情報ネットワークの形成とイベント開催」である。あるアイデアに共感する人々が集まり、時間、資金、知識、経験、労力を出し合いイベントや活動を実施し、そこでの出会いや成果を共有するが、団体を存続させることには重点をおかず、参加者がそれぞれの経験を次の活動へと活かす。第3は、「当事者としての問題の共有と解決への取り組み」である。住民たちが、自分たちが抱える困難を問題として認識しその解決に向けて具体的な対策を練る。たとえば子供たちの遊び場を確保するための運動などである（西川2015：148-152）。本論文では、第2のタイプの事例としてロンドン・フリー・スクールをとりあげる。

1では、60年代のノッティングヒルのコミュニティ活動に関する筆者のフィールドワークの経緯とLFSに関する資料の概要について説明し、2では、1966年に作成されたLFSのドキュメントと、筆者とのインタビューのなかでのジョン・ホプキンスの「語り方」との違いをとらえる。そのうえで、3では、当時のドキュメントとホプキンスへのインタビューからLFSの理念と設立の流れをまとめ、4では、LFSの活動の方向転換とニューズレターなどの紙媒体とイベントをとおした住民に働きかけ方をとらえ、5で、ホプキンスをはじめLFSの関係者のメディア戦略と運動の作り方を考察する。

1 ドキュメント収集—60年代の地域活動と紙媒体

筆者が1960年代のノッティングヒルに関心をもったのは、ロンドンでの現地調査をとおして注目するようになったコミュニティ活動家、ジョージ・クラーク（George Clark, 1926-1997）が、活動の拠点としていたからである。彼が関わった住民組織作りや住宅調査についての資料を、ケンジントン中央図書館の地域コーナー（Local Studies）で調べているうちに、60年代のノッティングヒルにおいて地域を拠点とする多様な実験的活動が行われていたことを知った（西川2015：141-144）。

2007年から2009年にかけては、毎年8月にロンドンに滞在し、多くの時間をこの図書館で過ごした。地域コーナーにある古いカードボックスには、万年筆で記された図書カードがあり、1960年代のノッティングヒルに関しても、ローカルな人物、組織、団体、活動、事件などについての情報や、地方新聞の記事、ニューズレターなどの資料の所在が記されていた。また、同図書館には、Kensington & Chelsea Community History Group（通称ヒストリー・トーク）というボランティア団体が、何年もかけて収集した地域活動に関する多数の資料が2006年に移管され（North Kensington Community Archive 2006）、そこには、60年代のノッティングヒルにおけるコミュニティ活動の記録も多数含まれていた。図書館で手にする当時の印刷物や写真からは、暮らしの詳細や住民が直面する厳しい生活状況や、社会を変えようとする活動家たちの熱い思いが伝わってきた。また1960年代においては、紙媒体が運動を展開する重要な手段になっていることにも気づいた。

ロンドン・フリー・スクール（LFS）に関しては、1966年当時に作成された次のような資料を見ることができた。①LFSの議事録や関係者への手紙、ポスター、住民に配布されたフライヤー、②LFSのニューズレター、③地方新聞に掲載されたLFS関連記事、④LFSに関する報告書など、である。

LFSは、1966年3月8日に初めての公開集会を開き、住民にLFSの活動の趣旨を説明し、フリー・スクールへの参加と協力を呼びかけ、地域における活動を本格的に始めた。資料①の議事録は、有志たちが毎週のようにジョン・ホプキンスのフラットに集まり、地域でのLFS設立に向けて議論を重ねた記録である。筆者の手元には、第5回（1966年1月25日）、第6回（2月8日）、第7回（2月15日）の議事録のコピーがある。いずれもホプキンスがタイプライターを用いて記したものを印刷し、関係者に配布している。LFS設立当初の理念や、資金、人材、場所の確保、宣伝、日程調整、作業分担など、活動を実施するうえでの過程を具体的に知ることができる。また、LFSの公開説明会の前には、集会のプログラムやフライヤー（図1、2）、ポスターが作成され、地域に配布された。そこには、LFSの活動の趣旨、集会当日のプログラム、LFSが開く予定の教室の詳細が記されている。

②は、LFSが地域で本格的に活動を開始した後に、ノッティングヒルで発行・販売したニューズレター（1部6ペンス）である。第1号（4月4日発行）の

London Free School

LFS

offers you free education through lectures and discussion groups in subjects essential to our daily life and work

HOUSING PROBLEMS Landlords, rent and what can be done about them. The opportunity to discuss your housing problems with expert advisers.

IMMIGRATION Who are the immigrants and why? Why 'a problem'?

RACE RELATIONS Why do you fear? Why are you feared?

THE COMMUNITY & YOU Why communities exist. How to set up a community. What is a family? Why do you live alone?

CHILDREN Normal, delinquent, bright, backward and otherwise. How to find a nursery school in your street.

ENGLISH TEACHING UNIT Improve your English.

EDUCATION What is available? What is available for your child? Night classes, courses, apprenticeships, further training.

UNIONS Why unions? How to join one. The union principle outside your work.

WAGES AND PRICES Why you're paid what you're paid. Why it costs what it costs.

MENTAL HEALTH What is a 'mental breakdown'? How society creates mental illness. What must be changed?

LAW Why it does what it does and how. Can you use it to help yourself? Goad and other resolutions.

MUSIC, ART AND LITERATURE From your own lives and communities. Other people's art, music and literature.

THE LONDON FREE SCHOOL IS NOT POLITICAL, NOT RACIAL, NOT INTELLECTUAL, NOT RELIGIOUS, NOT A CLUB. IT IS OPEN TO ALL.

On Tuesday March 8 1966 at 7.30
AT ST. PETERS' CHURCH HALL corner of Elgin Avenue and Chippenham Road
The first public meeting of the London Free School will be held in the Notting Hill area

This will be to explain what the Free School is and does, when and where.
A brief survey on the history of Notting Hill in relation to some of the subjects listed above will also be given.

図1 LFSフライヤー：1966年3月8日公開集会のプログラム

We are setting up discussion groups tonight and during the next few weeks which will be

LEARNING & TEACHING ABOUT:

HOUSING Peter Jenner, Steve Bully, George Clark
Who are renters so high? The Tenant's rights & powers.
Local provision, Housing Associations, Renters,
Mortgages and council housing.

FAMILIES & MENTAL HEALTH Phil Spinks, Mrs Laidler.
The Family as a unit in society. What is a serious breakdown, what are the
effects on the family and the individual. Children problems. Help to women about
family violence, an afternoon club for women, Subsidizing.

IMMIGRATION including their relations. Michael de Freitas, Peter
Jenner, George Clark, Orlando Patterson. How friction between different groups
operates, why we are afraid of others, Improving the situation. Civil rights.

LAW Dave Barry, Lawrence
CURRENT AFFAIRS: Ian Roberts,
Colleen, Hans Pothmann, The
Palmer, Maudslayi, Aldington.
current events in their national and international
settings. How events affect us. Issuing a news
bulletin containing our comments.

ENGLISH Irving
Finkler, Maria Alving.
Play reading, creative
writing, discussion,
public speaking, TV news
and other current discus-
sion, production of
drama in schools.

ECONOMICS
John Stoddard. Signs &
prices, Profit, Price
indexation, price fix-
ing, industrialism, inter-
nationalization of
wages.

COMPARATIVE RELIGION Peter Fingers and
Susan Cohen. Eastern and Western religions and philosophy.

PHOTOGRAPHY
Graham Kato, Arnold the
Street with 2 camera, film
can be the professional advice.

THE ARTS
music Dave Tomlin, Cornelius Cardew.
Making sounds and making music.
Heating sounds and hearing music.
painting Mick Shuster, Paul Harris.
Develop your talents, looking at
art, history of art, do some painting.

MODERN HISTORY Peter Roberts.
Western History for the past hundred years.

MATHS & STATISTICS Hilary Lamb.
National opinion polls & their shortcomings.

SCIENCE Frank Fuchs.
Basic physics and chemistry, Physiology,
Biology, Zoology, Scientific method.

Please add your own suggestions to this list

Please ask questions

図2 LFSフライヤー：開催予定のクラス，1966年3月

タイトルは *The Gate* であるが、第4号（5月23日発行）では *The Grove* へと変更している。LFSの活動の内容を紹介し、参加を呼びかけ、また、地域住民へのインタビューや、アンケート調査の結果、LFSスタッフによる取材記事、読者からの声などを掲載している。③は、*The Kensington News* や *The Kensington Post* など、60年代に発行されていた地方新聞であり、ケンジントン中央図書館では、マイクロフィルムから見る事ができた。資料②③を合わせて読むと、LFSが、メディアをとおして地域の話題として取り上げられていく過程がわかる。

設立当時のLFSの方向性を知るうえで、④のピーター・ジェナー（Peter Jenner, 1943-）による“*The London Free School*”（Jenner 1966）は貴重な中間報

告である。これは、1966年に発刊された雑誌 *Resurgence* の7/8月号に掲載された。ジェナーは、後に、ピンク・フロイドのマネージャーとなる人物であるが、当時は、ロンドン・スクール・オブ・エコノミックスの講師であり、LFSの準備段階から参加していた。報告書も、学術的な執筆スタイルとなっている。

この他に文献資料としては、マイケル・デ・フレイタス（Michael de Freitas, 1933-75）³⁾の自伝（Malik 1968）には、LFSについてもふれられている。デ・フレイタスは、LFSの関係者と住民をつなぐ重要な役割を果たしており、地域におけるLFSの活動の様子を具体的に知ることができる。

また、ロンドンの60年代の対抗文化的な活動について記した多数の書籍（Boyd 2006, Green 1988, Miles 2002, 2010, Nuttall 1968, Williams 2008 など）やノッティングヒル・カーニバルに関する文献（Blagrove Jr. ed. 2014, Cohen 1993, Vague 2009 など）やドキュメンタリー映像（Gammond 2008）においても、LFSについて言及されている。LFSの活動が、60年代以降、近年においても本や雑誌に扱われてきたことがわかる。筆者の関心は、こうした資料を手がかりに、当時の活動に関わった人々に会い、現在における彼らの語りと当時の資料を合わせながら読み解き、活動家（アクター）たちの視点から活動の方法をとらえることである。

2 ジョン・ホプキンズの重層的語り—パブリックイメージと現実

ジョン・ホプキンズは、ケンブリッジ大学で物理学と数学を学んだ。1958年に大学を卒業し、原子力研究所（Atomic Energy Research Establishment）に就職したが2年で辞職し、ロンドンへ移り住んだ。プロの写真家の助手をしながら技術と仕事を学び、数年後には独立しフリーランスとなり、1966年までカメラマンとして活躍した。*The Sunday Times* や *Melody Maker* などのマスメディアのなかで仕事をする一方で、*The Peace News* などにも協力している。

1965年には、ロンドンのロイヤル・アルバート・ホールにおいてアレン・ギンズバーク（Allen Ginsberg, 1926-1997）らによる詩の朗読パフォーマンスの企画、運営に携わり、7000人あまりの観客を集めた。その後、友人のバリー・マイルズ（Barry Miles, 1943-）とともに、ラブブックス（Lovebooks）を設立し、アメリカのビート小説をイギリスに紹介した。同じ年の秋にはノッティングヒルにおけるフリー・スクール設立を

友人たちに呼びかけ、翌年1966年はLFSの活動に奔走した。同年10月には、アンダーグラウンドの代表的な新聞、*The International Times*の発行に携わり、12月には、アメリカ人レコード・プロデューサーのジョー・ボイド (Joe Boyd, 1942-) と UFO クラブというライブハウスを設立した。その後、1967年には、薬物使用で逮捕され、有罪の判決を受け収監された。出所後、1968年6月には、ITの読者からの問い合わせに対応する部門をITから独立させ、BITという情報提供サービスセンターを設立した。1969年には、当時、開発されたばかりのビデオカメラを用いた活動を始め、その後、長年のパートナーとなる Sue Hall とともにファンタジー・ファクトリー (Fantasy Factory) を設立、1970年代以降は、コミュニティ・ビデオという分野を開拓、映像制作や教育の分野で活躍した。

私がジョン・ホプキンスと初めて会ったのは、2009年の夏である。その頃、私は、図書館での資料調査と並行して、1960年代にノッティングヒルのコミュニティ活動に携わった人々へのインタビューをすすめていた。取材をした人から別の人を紹介してもらい、毎年少しずつ調査のネットワークを広げた。

2009年8月22日に、アダム・リッチ (Adam Ritchie, 1940-) の話を聞いた。リッチは、1962年から66年7月までニューヨークに滞在し、イギリスに帰国後、友人のホプキンスに誘われてLFSの活動に関わるようになった。カメラマンであったリッチが、当時LFSの子供の遊び場プロジェクトの様子を撮影している。その写真をケンジントン中央図書館で見たことがある。遊びに夢中になる子供たちと彼らと接する若者たちの表情は、厳しい生活環境のなかでも「楽しみ」を取り入れるLFSの活動の一端を映し出しているようで印象的だった。リッチからは2時間あまり話を聞いた。LFS設立の経緯などの詳細については、ホッピー (ホプキンス) 本人に話を聞くのが良いと言い、彼の留守番電話に私を紹介するメッセージを残してくれた。リッチによると、ホプキンスへの取材申し込みは多く、また、パーキンソン病のために体調がすぐれないこともあり、彼に実際に会うことは難しいかもしれない、という話であった。

ホプキンスは、2008年に、*FROM THE HIP: Photographs by JOHN 'HOPPY' HOPKINS 1960-1966* という写真集を出版し、その翌年の2009年に、私がロンドンに滞在しているあいだにも、市内のLexi Cinemaという映画館内では、ジョン・ホプキンスの60年代の写真を展示していた。また、8月12日にロンドンのハウズ

マンズ書店 (Housmans Bookshop) で “The London Free School, Notting Hill 1966: Counter Culture, Community Action and Carnival Roots” と題したロンドン・フリー・スクールに関するトーク・イベントが行われた⁴⁾。ホプキンスにとっては、自分が撮影した写真作品とともに、彼の60年代が改めて注目され、病いと闘いながらもメディアからの取材を受け多忙な時期であった。

自己紹介とLFSについて話を伺いたいという内容のEメールをホプキンスへ送った。返信はすぐには来なかった。ところが5日後に、ホプキンス本人から私の宿泊先へ電話がかかってきた。「とても忙しくメールへの返信ができなかった」という丁寧なお詫びの言葉のあとに、「それで、いつ会いましょうか」と尋ねてくれた。9月2日に彼の自宅でありビデオ制作・教育関連の職場であったファンタジー・ファクトリーを訪ねることになった。

ノッティングヒルの60年代について関係者に話を聞くときには、その人が関わっていた活動に関する当時の記録のコピーを持参することになっていた。この日も、LFSの議事録などの記録をまず手渡した。ホプキンスは、コピーを見た瞬間に、「私がタイプしたものだ! すごいや!!」と言い、しばらく食い入るようにドキュメントを見ていた。自分が40年前に作成した資料と思いがけず対面し、記憶の扉が開いたのかもしれない。ホプキンスは2時間以上話し続けた。その後、2011年を中心に、2014年まで、合計7回⁵⁾のインタビューを行った。ホプキンスの「語り」の録音は、20時間をこえた。

2011年は、彼にとっては人生の転換期でもあった。病気が進行するなかで、この年には、生活と仕事の長年のパートナーと別居し、ターミナルケアを受けることを想定したカウンスル・フラットへ引っ越した。2011年2月の旧居での最後のインタビューでは、彼が70年代に仲間たちと制作した記録映像を何本も私に見せ解説してくれた。3時間にわたる映像に関する集中講義となった⁶⁾。2011年7月には3回のインタビューを、転居先の小さなフラットで行った (図3)。この頃のホプキンスは体調がよく、近所のカフェでのランチや1960年代からの友人を訪問する時には私を誘ってくれた。2014年9月14日にホプキンスと最後に会ったときには、複数の介護者が交替で24時間、付き添っていた。

以上のように、本論文は、ホプキンスへの長時間のインタビューと他の(元)活動家たちへの取材、そし

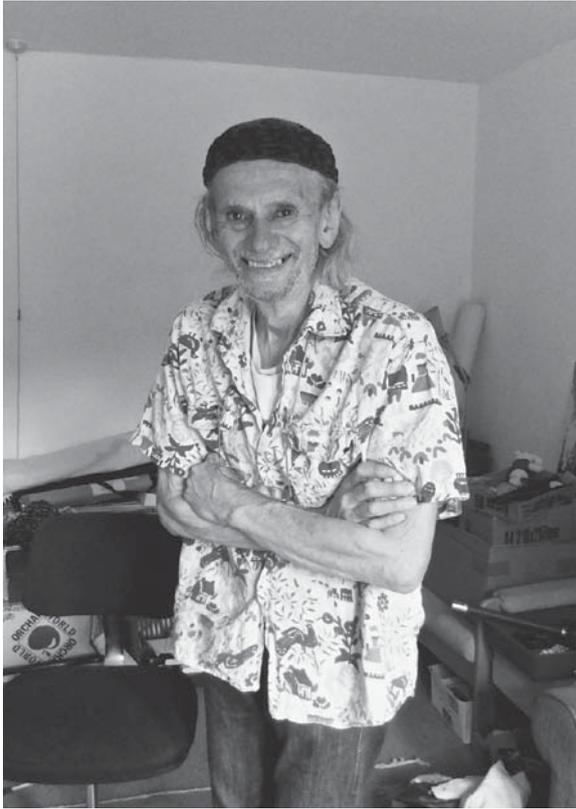


図3 John 'Hoppy' Hopkins, 2011年7月13日, 筆者撮影

て1960年代当時に作成されたドキュメントを含むさまざまな資料にもとづく。筆者とのインタビューのなかでのホプキンズの話し方は、1966年のLFS資料にみられる彼の文章とは大きく異なっていた。当時の記録は、明瞭かつ具体的で、半世紀後の現在にそれを読む私たちにも、現場の様子をありありと想像できる。そこでのホプキンズは、雑務をこなすメンバーにはつばをかける頼れる現場監督であり、組織を実質的に動かす事務局長であった。2000年代のインタビューのなかで私と話すホプキンズも、ユーモアにあふれ、親切だった。彼が話す英語を私が理解できないようであれば、別の表現で説明し直してくれた。にもかかわらず、ホプキンズのLFSに関する語り方は、時には抽象的で私には分かりにくかった。たとえば、plasticity (可塑性), meta-organization (メタ組織), camaraderie (友愛), zeitgeist (時代精神), happening (ハプニング) といった単語を多用した。

また、ホプキンズは実に豊富な話題をもつが、話があちらこちらに飛ぶ。脈絡なく話をしているのではなく、ある話に登場する多数の関係者が別の話題にも関連していて、一つの話のみを他と切り離して話す／理解することは難しかった。ホプキンズとのインタビューでは、あえてテーマをLFSやノッティングヒルには

しぼらなかつた。実際に、彼の話は多方向に広がった。時には彼の幼少時の思い出、家族や家系を遡ったファミリーヒストリーに及んだ⁷⁾。

ホプキンズは、60年代、70年代について多数の友人たちのそれぞれの活動にふれながら楽しそうに語ったが、その一方でマスメディアのなかで作られた60年代のジョン・ホッピー・ホプキンズ像に苦しまされてきたと話した。「今の自分は、日々体が不自由になり、視力が衰え幻視に悩まされ、字を書く事もパソコンを打つこともままならず、時には、何もしたくなく、ただ、ただ、怠惰にベッドに伏せていたい気分になる。そんな現実とは別に、メディアのなかのホッピーのイメージは60年代のままである」と言い、「だが、そのおかげで、自分が撮影した60年代の写真が売れ生活することができるのだが」、とも付け加えた。どんな深刻な話をするときもユーモアを忘れず、インタビュアーを笑わせた。しだいに記憶が失われ自分が「愚か(stupid)」になってゆくと嘆いた。自分の話が録音され、本というかたちで記憶／ヒストリーが残ることを望んだ。

2015年1月30日にジョン・ホプキンズが亡くなったことを、私はその数日後にオンラインのニュースで知った。各新聞社の死亡記事には、60年代のカリスマ的な写真家、カウンターカルチャーの先駆者として紹介されていた⁸⁾。ホプキンズの死後、彼が作成した60年代の記録や彼のインタビュー録音と文字記録を聞き、読み返し、彼の追悼記事や60年代に関する文献を読んだ。ホプキンズがインタビューのなかで語ったマスメディアが作り出したホプキンズ像と彼の自意識とのあいだのずれは、これらの資料を改めて読み直すひとつの鍵となった。ホプキンズは、自らが新しいメディアを作り出し、異なる媒体を使い分け、多様な活動を展開してきた。時にはメディアのなかで60年代のホッピーを自分で演出し、同時にマスメディアの中で作られた60年代のホッピー像に自らが縛られてきた。

ホプキンズは70年代以降も、さまざまなメディアのなかで60年代について語ることを求められ、それに応じてきた。自らを語り／語られるなかで、自分の60年代を見直し、そこで概念的な語り方のスタイルを獲得してきたのではないかと思われる。60年代に次々と新しい活動に携わってきたからこそ、それらの全体を凝縮し60年代という時代をつなぐ精神や斬新さを表現し総括しながら語ることを求められてきた。ところが、60年代という時代や文化や経験を共有せず、英語ネイティブでもメディア関係者でもない日本人に、60年代

について説明するうちに—あるいは、彼がなぜこうした語り方をするのだろうというインタビューアの疑問の眼差しに応じて—ホプキンズは、私との長い対話のなかで今の自分についても語り始めたのかもしれない。

ホプキンズとのインタビューは、録音の文字記録を編集し、*Grassroots Media Zine (GMZ) 3*⁹⁾に、“John ‘Hoppy’ Hopkins interviews from 2009-2014”という特集にまとめた(図4, 5)。そこでは、ホプキンズのインタビューの「語り」をできるかぎり原文にちかいかい英文で掲載し、他の活動家たちのインタビューや1960年代当時のドキュメントや他の文献からの引用を加えた。*GMZ*では、調査から得た原資料をより多く掲載し、筆者とホプキンズとの出会いから彼の60年代の活動と現在を追う一連の物語として描くことに重点をおいた。この論文においては、LFSの活動に焦点をあて、*GMZ*で提示した資料を解釈、分析しながら、ホプキンズや関係者たちがどのようにメディアを作り利用しながら、ノッティングヒルという地域において活動を展開したのか、その方法を明らかにしていく。

3 メタ組織としてのロンドン・フリー・スクール

LFSは、準備期間を含めると1965年末から1966年末まで、1年あまり続いた。ホプキンズは、「私はいろいろな活動を始めるのはうまいんだが、終わり方はそうでもないな」と言い、LFSについても、いつどんなふうにならなくなったのかは記憶していない。当時の記録やその後の文献資料から見る限りでは、LFSは、始まりから終わりまで4つの段階があった。第1に、ホプキンズが友人たちに呼びかけLFSについて議論を重ねる準備段階、第2に、ノッティングヒルの住民たちに呼びかけ公開集会を開催し、運営委員会を立ち上げ、本格的に自由学校の活動を開始する段階、第3に、教育活動は限られたクラスのものに止まり、その他の広い意味で住民のニーズに応える地域での活動を展開する段階、第4に、LFSの関係者は、地域内外でのそれぞれの活動へと移行し、LFSという名前が消失してゆく段階である。本章では、上記の第1と第2段階、つまり、LFS設立と自由学校を開始する段階をたどる。そのうえで次章では、第3段階について、LFSが教育に限定せず地域に密着した活動をどのように展開するのかを明らかにしていく。

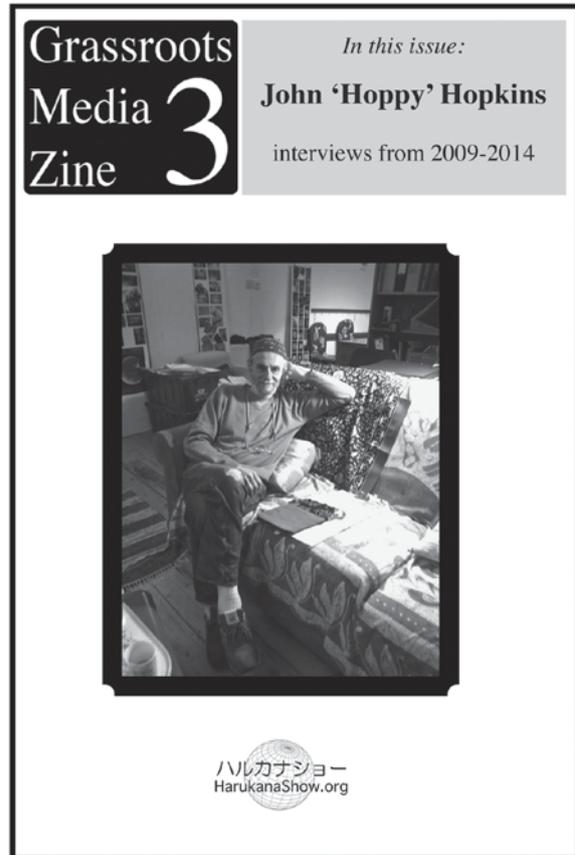


図4 *Grassroots Media Zine3*, 中表紙, 写真 John ‘Hoppy’ Hopkins, 2009年9月2日筆者撮影



図5 *Grassroots Media Zine3*, 目次

LFS の理念

1965年7月、ホプキンズは、ニューポート・ジャズ・フェスティバル取材のために渡米し、ニューヨークに滞在し、さまざまな刺激を受けた。ニューヨークでは、ちょうど同じ頃、Allen KrebsらがFree University of New York (FUNY)を開始し、教師と学生のあいだの階層性をとりはらった新しい教育のかたちを模索していた (Berke 1965, Berke ed. 1969, Krebs 1967, Umezaki 2013, Vaughan 1966)。ホプキンズは、FUNYの発想から刺激を受けイギリスへ持ち帰り、さっそく始めたのがロンドン・フリー・スクールであった (Miles 2010: 186-187, Malchow 2011: 87-88)¹⁰⁾。ジェナーは、LFSとは、アメリカの自由大学運動に触発されたアイデアであり、イギリスにおいてより一層に保守的な体制にある教育制度と「ソーセージ製造機械のような大衆教育」のあり方を打破しようとする試みではあったと説明している (Jenner 1966: 16)。

ホプキンズ自身は、インタビューのなかでは、「LFSのアイデアはどこから得たのか」という私の質問にたいして、「たぶんアメリカの何かをモデルにしたのだろう、よく覚えていない」と言いそれ以上の詳細にはふれず、しかし、次のように話した。「LFSが面白いのは、その可塑性 (plasticity) にある。こうでなきゃいけない、といった定型はなく、誰かが芸術や言語のクラスをもちたければできるし、正式な形やシラバスはなかった。全然違う考えが集まっても受け入れ、いろいろなものがごっちゃまぜに豊かに存在していた。それを plasticity と言うのは、つまり、そこには従うべきヒエラルヒーも、学習プログラムもなく、何も決まってないから、何でも起こりうるという意味だ。LFSとは、言うならば、メタ組織 (meta-organization) だ。「私はカメラマンとしてメディアを意識してきたので、ストリート・ライフ (street life) も、もう1つのメディアだと考えている。私の関心は、コミュニケーション、つまり、コミュニケーションと情報の政治だ。(いろいろな要素が混じり合う) それで、LFSにはよくあてはまる。あなたが、ある方法で音楽を教えたい、私が別の方法で音楽を教えたい、としてもそれでいい、皆が同意する必要はない、それがLFSだ」。

議論好きな研究者や活動家、独創的なアーティストを多数集めて、ノッティングヒルという多様な人々と文化が混在し激しく変化する場所に外部の人間が入り込み、定型がないメタ組織をどうやって立ち上げ機能させていくのだろう。ホプキンズは、当時、ノッティ

ングヒルに隣接する地域 (115 Queensway, W2) に住み、複数の友人たちとフラットをシェアしていた。国内外からの訪問者も泊まり込み、さまざまなアーティストや活動家のたまり場となっていた。また、ノッティングヒルには、ホプキンズの知り合いのアーティストたちも多く住み、彼らのあいだで地域のなかに緩やかなつながりがあった¹¹⁾。ノッティングヒルをフリー・スクールの対象地に選んだのは、そこが多様な問題を抱えた地域であることを認識したうえであるが、それ以上に、ホプキンズたちにとっては、仲間が集まりやすい地域でもあったのだろう。

ホプキンズは、ノッティングヒルやロンドンでの一連のアンダーグラウンドな活動に関わった人々のすでにあるネットワークをベースに、さら精力的に知人に声をかけた。マイケル・デ・フレイタスは、「ホプキンズから電話をもらい、新しい教育活動を始めるから集会に来ないかと誘われた」と自伝に記している (Malik 1968: 152-153)¹²⁾。トリニダード・トバゴ出身で、ノッティングヒルの諸事情に精通するデ・フレイタスの参加は、LFSと現地をつなぐ強力な媒体となった。アメリカ人のジョー・ボイドも、渡英した際に、ホプキンズに連れられLFSの最初の集会から参加している (Boyd 2006: 134)。

議論の共有

LFSの準備集会は毎週のように行われ、熱い議論が繰り広げられた。この頃の記録を理解するうえで重要となるのは、ホプキンズが、ラブブックスという出版業に携わり、かつ、自宅に本格的な印刷機を備えていたことである¹³⁾。ホプキンズは、中古のオフセット・リソ・プリンターを100ポンドで購入し自分で組み立てた。ホプキンズのフラットには、仲間が集まることのできる広さの部屋と電話があり、そして自由に印刷機を使うことができた。こうした環境のなかで、1965年11月にフリー・スクール設立のための最初の会合が開かれ、その後も回を重ねた。

ホプキンズが記録した議事録は、開催日時、場所、参加者名に続き、議論別に通し番号がふられ、発言者の名前と議論の内容が、具体的、かつ簡潔に記録され、最後には、次回の集会の開催予定と議題まできちんと記されている。たとえば、1966年2月8日開催の第6回集会の議事録の最後には、次の集会は1週間後の2月15日午後9時15分に始まり、次のような議題を扱う予定となっている。「勧誘グループからの報告」、「公開集会の形式」、「LFSのビジネス名、レターヘッド」、

「LFSの場所確保の契約」, 「外部交渉」, 「グループ作りの費用」, 「各種委員会報告」, 「LFSのミッション原案」, 「募金」, 「その他」, などである。またこの日の議事録には付録としてボイドが作成したLFSのミッションについての原案も印刷され、これをもとに次の集会で議論すると記されている。

そして、翌週には予定とおりに第7回の会合が開かれた。議事録には、最初の議題であった「勧誘グループからの報告」については6項目の内容が記され、LFSの関係者が、住民への公開説明会に先立ってノッティングヒルで組織的な情報宣伝活動を行っていたことがわかる。たとえば、こんな内容である。「LFSの勧誘員が、ノッティングヒル内の公営住宅や業者の賃貸住宅を訪問したが、住民からの反応はおおむねよい。公団の白人住民は、他の賃貸住宅に住むカラードより関心が低いようだ」, 「配布されたパンフレットは、住民にしっかり読まれている。住所の記載など一部の修正が必要である」, 「ポスターは、なんとかしてお店のショーウィンドーに貼らせてもらうべきだ」, 「パンフレットは1日2回ラッシュアワー時に配布するのが効果的である」, 「勧誘員からの情報は記録カードに記しLSE (London School of Economics) で分析中である。肯定、否定的意見がある」, 「勧誘の方法について、帰宅途中の通行の邪魔をしない、子供がドアを開けても中に入らない、などの注意が必要である。詳細はセクレタリーの記録を参照のこと」, 「18時間しか宣伝、勧誘の時間を確保していないが、人数が絶対的に不足している」, 「最後の10日間にはとくに女性勧誘員が来てほしい。また情報収集、記録の人員も必要である」。

同議事録にはさらに、ノッティングヒル内にLFSの場所を確保するための契約や、活動の諸経費のことから、LFSのビジネスレターのデザインについてまでふれられている。LFSのノッティングヒルでの新しい拠点となる建物の家主は、ジョン・ミッシェルとマイケル・デ・フレイタスであるが、彼らの好意によって、地下室を1年6ヶ月無料で借りることになった。LFSの住所は、その後、26 Powis Terraceとなり、この建物の地下が事務所となった。

2月15日午後9時過ぎに始まった集会は、おそらく夜中まで続いたことであろう。ホプキンズは会議後すぐにこの膨大な議論をまとめ、次の議題も合わせてタイプしたものを、印刷して関係者に手渡し、あるいは郵送した。議事録だけでなく、ホプキンズは重要な局面では、タイプした手紙を印刷し関係者に送り一人一人に呼びかけている。たとえば、3月8日の公開集会

の翌日、3月9日には、「重要、注意深く読むように」という見出しで、長文のメッセージを配布している。次のよう内容である。「親愛なる友人へ、公開集会は終わり、それなりの成果はあったが、これからがLFSを本格的に機能させていくうえで正念場である。現段階では、何の方向性も決まっておらず、何も始まってはいない。次の日曜日2時半からのハウズマンズでの集まりでは、運営委員会を立ち上げ、そこからLFSは動き出す。そのためのとても重要な集会である。万が一、別の予定が入っている場合でも、どちらが大事か、よく考えてほしい。次の集会に欠席し、そこで決まったことにたいして、後から変更はできない。何をしておいても参加するように」。追伸には、その前日の土曜日には、LFSの新事務所での清掃大会をするから、ポロ布をもって参加してほしいと呼びかけている。

議事録は、住民や読者に届けるニューズレターとは異なり、関係者に配布される基本的には内部資料である。こうした記録をこれほど丹念に残すのは、ホプキンズの性格によるところも大きい。それだけでなく、メンバーシップや規則にしばられず誰でも参加できる有志の集まりを組織化するうえで、不可欠な方法であったにちがいない。LFSを設立し、活動を実施するという現実目標に向けて、準備集会で、何を議論、決定し、次に何をするのかを、参加者だけでなく議論に参加していない欠席者にも伝え、ルールによってではなく、自分達の足跡を記録に残すことによって情報を共有し、次を策定していくというやり方が生み出されていった。

自由学校の挫折

LFSは、1966年3月8日にSt. Peter Church Hallで住民への説明会を開催し、「最初の公開集會に集まった120人のうち50人以上が地域住民で、LFSの趣旨説明にたいする反応も良かった」(Jenner 1966: 17)。住民の意見もとりいれ、LFSは地域の人々とさまざまな種類のグループを立ち上げた。4月4日付の最初のニューズレター (*The Gate*, Vol. 1, No. 1) には、LFSが提供する予定の15ほどのグループ名が並び、担当者、場所、時間などが記されている¹⁴⁾。たとえば、「労働組合」, 「写真」, 「英語 (一般)」, 「英語 (読み書き)」, 「比較宗教」, 「音楽」, 「住宅 & 移民」, 「法律」, 「現代史 & 世界権力構造」, 「家族・子供・メンタルヘルス」, 「ダンス」, 「時事問題」, 「経済」, 「演劇」などである。大学の講義科目や左翼系団体の勉強会に見られるようなグループ名もあれば、アート系のグループも多い。

それまでノッティングヒルにおいて存在しなかった自由な発想のもとで準備された多彩な活動ではあったが、ジェナーによると、実際に蓋を開けてみると、「何も起こらなかった (nothing happened)」。「実際には LFS の活動は予定とおりに始まらず、さらに悪いことに、一部のクラスをのぞいて、地域の住民がほとんど参加しなかった」、「今後は、自由学校の理念の原点にもどって、ネイバーフッド・スクールとして、住民のニーズに応えた活動を展開するべきだ」と述べている (Jenner 1966: 16-17)。

ホプキンズは、グリーンインタビューのなかで、「ノッティングヒルのフリー・スクールは、一種のペテン (scam) だった。アイデアは盛りだくさんだったけれど、それだけの内容はなくて十分に機能しなかった」(Green 1988: 96) と述べている。たしかに、理想と現実とはかけ離れていたようだが、しかし、マイケル・デ・フレイトスやローン・ラスレット (Rhaune Laslett: 1919-2002)¹⁵⁾ など、ノッティングヒル住民が開催したクラスには人が集まり盛況だった。

たとえば、デ・フレイトスは、彼が LFS で開講した英語のクラスの様子を自伝に詳しく記述している。要約すると次のような内容である。デ・フレイトスは、ホプキンズにどんなクラスを担当したいかと問われ、英語の読み書きができない移民のために基礎英語のクラスを開きたいと考えた。「私の最初のクラスには、たくさんの中高年のアイルランド人、アフリカ人、それから一人だけウエスト・インディアンが参加した。多くはアルファベットも知らなかったが、ここからどんな奇跡が起こるのか期待の眼差しで私を見つめた」。「まずは、教育が人生にとってどれほど価値があり彼らの子供たちにとっても役立つものであるかを述べ、それから私自身の移民としての体験を話し、参加者にそれぞれの体験を尋ねた。すると、誰もが堰を切ったかのようにノッティングヒルでの苦労話や密かな楽しみ、困っていることを話し始めた。そこで、黒板に彼らの話のポイントを綴り、その単語を書き写させる。そこから、少しずつ文字を学び字が書けるようになっていった」(Malik 1968: 154-155)。

様々な人々が集まり情報を共有し何かを生み出す創造的な活動、という LFS の理念を理解し、地域に暮らす人々に実践をとおして伝えたのは、自由学校という概念を持ち込んだ識者やアーティストではなく、さまざまな経緯をへてノッティングヒルに移住し、情報や人が集まる場がどれほど大切か、人々が何を必要としているかを、身にしみて知っているデ・フレイトス

やラスレットだったのかもしれない。彼らが媒体となつて、LFS は、自由学校というよりは地域のニーズに応えた活動へと展開していく。

4 LFS のメディア展開

地域の情報を伝えるニューズレター

LFS の活動の方向転換をよく示しているのが、ニューズレターの名称変更である。1966年4月に発行された最初のニューズレターのタイトルは *The Gate* であったが、5月には *The Grove* となった。Gate とは、ノッティングヒル南部の Notting Hill Gate の略称であり、LFS 関係者やアーティストにとっては馴染みが深い場所であった。しかし黒人たちにとっての拠点はむしろ北部の Ladbroke Grove であり¹⁶⁾、地元の人々は略して Grove と呼んでいた。LFS の関係者たちは、最初は自分たちにとって身近な Gate をニューズレターのタイトルにしたが、やがて、自分たちよりも住民にとって親しみがある地名を用いるほうが、地域に密着した印象を読者に与えるのではないかと考え、*The Grove* に名前を変えた¹⁷⁾。

そして LFS の存在を地域内外に広く知らせることになったのは、ボクシング世界ヘビー級チャンピオン、モハメッド・アリのノッティングヒルへの訪問である。マイケル・デ・フレイトスがアリ側と交渉し、5月21日にヘンリー・クーパーと対戦するためにロンドンに滞在していたア리를 LFS に招待した。1966年5月15日午後3時に、世界チャンピオン本人がラスレットの自宅を訪ね、そこで開かれていた子どもたちのクラスに参加した。滞在時間はわずか10分ほどであったが、周囲の道路には大勢の人々が詰めかけ新聞がその様子を報道した¹⁸⁾。5月23日発行の LFS のニューズレターの巻頭には写真入りで、その時の様子を詳しく伝えている (*The Grove*, Vol. 1, No. 4)。同じページに、THE GROVE の文字の下に、「ノッティングヒル・ネイバーフッド・ニューズレター」と記し、住民に次のように呼びかけている。「*The Grove* は、ノッティングヒルの住民のための情報誌です。皆さんの考えやさまざまな情報を掲載することができます。あなたの子供が参加できるプレー・グループの活動が、近所のどこにありますか。この地域で誰かと組んで音楽をやりたいと思ったときどうしますか。空きスペースを貸し出した、家賃を低くおさえたい、そんな要望はありませんか。あなたの問いへの回答がみつからない場合も情報の探し方がわかるかもしれません」。

また、同号には、「LFS とは何か」と題して次のように説明している。「ロンドン・フリー・スクール、略してLFSは、1966年3月にノッティングヒルに設立されました。日々の暮らしのなかで生じるさまざまな疑問、問題を、一緒に集まって議論する、そんな場があればと考えたからです。たとえば、学校というシステムや、小さな子どもたちが利用できる施設や、法律の問題や、住居、賃金、メンタルヘルス、といった問題について知りたい、住宅関連団体や、消費者協会、スポーツや看護のグループをどうやって始めればよいだろう、個人では対応できない緊急の問題が生じたらどう対処するのか、どうしたら演劇や音楽や絵画などの趣味を始めることができるだろうか。こうした問題にたいして、手始めにまず、小さなグループを作って話し合い、いろいろな分野の専門家を招いて情報を提供してもらうことができれば、最も良いのではないのでしょうか。....なお、LFSは、政治的、宗教的活動ではありません」。

同じページには、小さくではあるが、「ストリート・カーニバル」という見出しの記事も掲載されている。「7月にストリート・カーニバルを予定しています。住民の参加希望、ご意見など、ぜひお寄せください。連絡はジョン・ホプキンズ、PAR 1489, ローニ・ラスレット PAR 9883 まで」。また、「広告」も募集している。「*The Grove* に広告を出してあなたのビジネスの収益を増やしませんか。このニュースレターは、現在は4000人の読者がいますが、潜在的には40000人以上と考えています。というのも、*The Grove* のコピーは、ノッティングヒルの住民のあいだで回し読みされているからです。あなたのコミュニティの顧客に知らせるために、THE GROVE をご利用ください。ご連絡は、26 Powis Terrace W11 へ」。デ・フレイタスによると、モハメッド・アリの来訪によってLFSへの注目が集まり、*The Grove* は2000部を売り上げ、LFSがすすめている子どもの遊び場を作るプロジェクトへの寄付も集まった (Malik 1968: 156)。

The Grove の次の号 (Vol. 1, No. 5, 23 May 1966) では、巻頭で、「September Fayre」¹⁹⁾ と題して、1966年9月にノッティングヒル・フェアを開催するとして、実行委員のラスレットへのインタビューを掲載している (図6)。彼女の自宅が実行委員会の住所となっている。この号では、フェア期間、9月18日 (日) から24日 (土) までの毎日のイベント予定まで告知している。そして、忘れずに寄付を呼びかけている。同号ではまた、「なぜ、変わるのか?」と題して、LFSの現

THE GROVE
notting hill
neighbourhood
newsletter
6d
London, 23 June 1966

september fayre
pageant, fireworks, music, plays, poetry

September 1966 will be a landmark in Notting Hill. For the first time this century--apart from a Bank Holiday entertainment that survived until the First World War--Notting Hill is to have its own Fair. Or Fayre, as they seem to be calling it. An opening pageant, with all the glamour and happiness of the Mardi Gras; a week of evening entertainments at low prices; a Grand Torchlight Procession ending in a Firework Display; these are some of the activities planned by the Notting Hill Fayre Committee. Last week GROVE visited the "office" in the front room of 34 Tavistock Crescent and asked Committee Secretary Mrs Rhaume Laslett just why it was all happening. "We felt that although West Indians, Africans, Irish and many other nationalities all live in a very congested area, there is very little communication between us. If we can infect them with a desire to participate then this can only have good results. Of course, not everyone likes to be in the public eye--but there are many ways in which people can participate to make it a success. We need carpenters, painters, seamstresses, wardrobe assistants, secretarial help, musicians, actors and organisers."

What was the local reaction so far?
"Very Good! The Kensington Post said they would enter a float in the pageant, a large brewery is interested and so are some big department stores. Superintendents of Notting Hill and Harrow Road Police Stations are being most cooperative. (continued on back page)

deregistered cars
john hopkins
(continued on back page)

VOL 1
NO 5
PUBLISHED
BY LONDON
FREE SCHOOL
26 POWIS
TERRACE W11

図6 *The Grove*, Vol 1, No. 5, 23 June 1966

状と展望について次のように率直に述べている。「3月の集会では、いろいろなクラスを始める計画でしたが、実際には参加者がほとんど集まりませんでした。現在は、音楽などの一部のクラスを継続しています。今後は、地域の人々とのつながりを深めながら、LFSはコミュニティの人々の関心や要望に応じたいくつかの活動を展開していくつもりです。たとえば、子供たちの遊び場作りのプロジェクトや、また週に2回のシニアとジュニアのボクシングクラスや、10代のグループの活動も新たに始める予定です」。

The Grove は、LFSの活動についてだけでなく、ノッティングヒルの他のコミュニティ活動の紹介や、時には地域のゴミ問題や警察や行政への要望を尋ねるアンケート調査を行いその結果をまとめて掲載している。ジャンルを問わず住民に役立つ町の情報を提供しようとした²⁰⁾。

地方新聞との連携

1966年7月以降のLFSは、9月に開催予定のカーニバルと子供の遊び場作りプロジェクトに集中していく。また、地域の商業新聞がLFSに注目するようになってからは、新聞紙上でより詳しく、随時にLFSに関するニュースが報道されるようになった。とくに、カーニバルに関しては、ケンジントンを中心とする新聞2紙、*The Kensington News* と *The Kensington Post* に計画が詳しく掲載され (図7)、その後も、カーニ



図7 “Planned for the autumn... A Notting Hill Festival”, The Kensington Post, 10 June 1966

バル実施に向けての途中経過がしばしば報道された²¹⁾。ケンジントン地方行政は、LFS が主催するノッティングヒル・フェアの開催を支持し助成金を出すと発表した後に、理由を明確にしないままその決定を取り消した。その背景には、マイケル・デ・フレイトスが率いる黒人の過激な政治団体²²⁾とLFSとの関係があると考えられた。LFSのセクレタリーとしてラスレットがThe Kensington Newsからの取材を受け、この問題について問われ、「デ・フレイトスの黒人ムスリムの運動とLFSとは、関係はありません。LFSは、行政からの圧力に屈せず9月のフェアを実施する予定です。そのための寄付も募っています²³⁾」と述べている。カーニバル実施に向けての紆余曲折をへた過程が随時に新聞に報道されることは、地域住民にノッティングヒルで行われる新たなイベントについて知らせる効果はあった。

ところで、地方新聞におけるLFSに関する記事には、ホプキンズの名前は見られない。LFSが方向転換しより地域に密着した活動を展開していくと、活動の中心やメディアへの対応はラスレットら地元住民やそれぞれの活動の担当者に委ねられた。9月のカーニバルは成功したが、しかし、十分な資金は集まらず、かかった費用を充当する必要がある。このため、ホプキンズやボイド、ジェナーたちは、ノッティングヒルにあるAll Saints Church Hallでコンサートを開催して活動資金を作ることにした。9月末から毎週行わ

れたライブに何度も出演したのが、当時無名だったピンク・フロイドであった(Boyd 2006: 135)。イベントは成功し、1966年12月には、ホプキンズとボイドは、ライブショーを行うUFOクラブを設立し、1966年末には、LFSとしての活動は行われなくなった。

5 情報と人と場所をつなぐ

LFSは自由学校として始まり、とりとめなく消えた活動であるかのような印象を受ける。しかしホプキンズが関わった60年代の一連の活動としてLFSを見ると、そこには共通する思想と方法があることがわかる。ホプキンズの活動のキーワードは「ハプニング」である。1950年代末から60年代にかけて北米やヨーロッパを中心としてひろまった前衛的な芸術運動のひとつのスタイルであるが²⁴⁾、ホプキンズ自身は、インタビューのなかで次のように説明している。「ハプニングの哲学とは、あなたが何かイベントを準備するとする。しかし、そのイベントの目的を完全には決めてしまわない。そこで実際には何が起こるかは定かではない。ハプニングの精神はたいへん重要で、いろいろな状況のなかで応用できる」。ホプキンズの活動とは、「何かを達成する」ことが目的ではなく、多様な人々がある場を共有し他者と接することで互いが触発され「何かが生じ」、そこで生まれた出会いや成果を共有し、参加者がそれぞれに自分たちの次の活動へ活かしていくことである。ホプキンズの関心は、情報を共有するための媒体とハプニングを生み出す仕掛けを作り出すことであった。

ホプキンズにとっての情報とは、それぞれの人生の経験であったり、発想であったり、表現であったり、スキルであったりする。彼が、あえてオルタナティブ・メディアやコミュニティ・メディアにこだわるのは、あるニュースをできるだけ多くの人に届けようとするマスメディアの発想ではなく、社会において少数の立場にある人々にとって必要とされる情報をも届けられる媒体作りを意識しているからである(GMZ1: 7-8)。1960年代後半に、ホプキンズは友人たちと一緒にさまざまなメディアを作りだしてきた。1965年に、アレン・ギンズパークらによる詩の朗読イベントを開催したときにホプキンズは、多くの人々がこうした表現やイベントに関心があるのに、関連情報を得る／伝える媒体がないことを痛感した。このイベントの後すぐに、ホプキンズはマイルズとラブブックスを立ち上げウィリアム・バロZZらのビート小説をイギリスに紹介し、

また *The Longhair Times* という雑誌を刊行した。そして、1966年10月には最初の *The International Times* を発行した。IT の最盛期²⁵⁾ には、とくに1968年5月以降、事務所にさまざまな内容の問い合わせ電話が殺到した²⁶⁾。この状況を見て、ホプキンズが提案してITからは独立したBITという情報サービスセンターを設立した。そこでは、情報を分類、蓄積する仕組み (memory bank)²⁷⁾ を作り、利用者からの電話での問い合わせに対応した (図8)。

BIT PHONE (01) 229 0053

THE bit LIST

BIT is operating as a service which answers ANY question. If we don't have the answer we automatically refer you to someone who does, or we make the best suggestion we can as to where you will find the information.

BIT has only been operative for three weeks and we print below the subject heads which we can now deal with directly. This list is being constantly revised and will be published regularly as it develops.

Sources:

1. AGIT - PROP 607 0155
2. Daily Telegraph Information Service. F.L.F. 4242, general info. except legal and medical. If they don't have the information that you require, they will refer you to where you can get it, PROVIDED YOU ASK THEM.
3. IT 836 3727. A certain amount of info. available on contacts in other countries especially Europe.
4. OZ 229 4623 (As IT).

A CADMIC (1), Actors, Addict, Administration, Advertising, Agency, AGIT-PROP, Alcoholics, All-nighters, Amsterd., Answering Service, Answering Machines, Antibureaucracy, Anti-University, Apple, Architects (1), Arrivals, Art (1), Artists, Art Colleges, Art Galleries, Arts Council.

B BC, Beatles, Belgium, BENEFIT, BIT, Blackhill Enterprises, Black Power, Body, Books, Bookshops, Bouquies, British Film Institute, Building.

C AFES, Cannabis, Carpentry, Cars, Chemists (late-night), Children (1), Civil Rights, Clinics, Clothes, Clothes Shops, Clubs, Club Licensing, Coffee Bars, Communities, Communications, Community Centres, Computers (1), Concerts, Contraception, Co-ordination, Crash Pads, Culture, Cybernetics.

D ANCERS, Decorating, Design, Dec-Jays, Diggers, Discharged Prisoners, Distribution, Doctors, Draft Counselling Service, Dreammakers, Driving, Drug Law, Drugs, Duplicating.

E ASTBOURNE, Edinburgh, Education, E.E.G., Effects, Electricians (1), Electric Light Installation, Electrical Supplies, Electrical Repairs, Electronics, Equipment, Estate Agents, Events, Eyes.

F ANCY Goods, Film Companies, Film Makers, Film Makers Co-op, Film Processing, Film Producers, Films (1), Finance, F.I.T., Food, Foreign Travel, France, Free Facilities, Furniture.

G OLD, Govt. Agencies, Graffiti, Grass, Graphics, Graphics & Design (1), Greater London Arts Assoc., GPO.

H ABITATION, Hairdressing, Heroin, Hippie, Hire, Home Office, Hookahs, Hospitals, Housecleaning, Housing, Human Rights.

I L.F.A., Immigration, India, Indica, Information, Information Processing, Information Retrieval, Information Service, Inter-action, International Times, Inter-zone A, Ireland, Italy.

J EWELRY, Jewish, J.L.T.V., Jobs, Journalists (1), Junkies.

L ANGUAGE, Law, Lawyers (1), Law Sentences, Legal, Legal Advice, Light Machines, Light Shows (1), Lighting Equipment, Liquids, Locksmiths, London Festival, London General.

M ACHINES, Macrobiotic, Magazines, Malfunction, Mandalas, Market, Marriage, Media, Medical Practitioners (1), Medicine, Methodism, Middle Earth, Milan, Missing Persons, Miscellaneous, Motivation, Movies, Music (1), Musicians, Musicians Register, Mycology.

N EWSPAPERS, Neurophysiology.

O CCULT, Office, Office Supplies, Official, Organisations (1), Organisers (1).

P AINTERS, Palmreaders, Paris, Pavilions in the Park, Performance, Phenomenology, Pharmacologist, Phone Nos., Photographs, Photographers (1), Plastics, Plumbing, Police, Pop, Pop Concerts, Posters, Pregnancy, Premises, Press (friendly), (1) Print, Printers, Prison, Problems Unlimited, Promotion, Proof Reading, (1), Property Ownership, Publications, Publicist, Public Relations, Publicity (1) Poets (1), Publishing (1).

R ADIO, Record Agencies, Record Companies, Record Shops, Rehearsal Rooms, Release, Religion, Requests, Requirements, Research, Restaurants.

S ALL, Sandals, Schools, Sculpture, Services, Sex, Share Promotion, Shelter, Shops, Sprints, Society, Sociology, Solicitors, SOMA, Songwriters, Sound, Stationery, Stamps, Students, SUBD, Supermarket, Systems.

T ELICOMMUNICATIONS, Telephones, Television (1), Theatre (1), Think-Tank, Time, Translation (1), Transport (1), Travel, Tribes, Typsetting, Typists (1), Touch Experimentation.

U NIONS, University, UNO.

V ELIFARI, Whereabouts, Writers (1).

W IROX.

X

Y OUTH.

図8 “The Bit List”, *The International Times*, No. 37, 9 August 1968

自由学校のアイデアもまた、ホプキンズにとってはある種の情報共有の仕組みであった。つまり、地域内外のさまざまな人々が、互いの経験やスキルや知恵を学び合い情報を共有することができる開かれた場所を地域に作ろうとした。LFSは自由学校としてはうまく機能しなかったが、それでも、ホプキンズたちは、紙媒体を巧みに使いながらLFSの活動を地域に展開

させていった。そこでの情報やメディアの作り方、使い方には、ホプキンズが関わった他の活動にも共通する次のような方法が見られる。第1に、現状を注意深く観察し記録する。第2に、活動のターゲット層から情報を収集し分析する。第3に、情報を発信する際にはデザインを工夫する。第4に、複数のメディアを組み合わせる。

LFSの場合、ホプキンズが作成した集会の議事録が、第1の参与観察の記録のわかりやすい例である。ホプキンズは毎回、長時間にわたる議論を項目に分け、通し番号をつけ、その内容を几帳面に記録に残した。さらには、議事録を印刷して関係者に配布し、集会の参加者だけでなく欠席者とも情報を共有した。この記録は、彼らの活動に関心をもつ人には議論の経緯を知る貴重な資料となった。こうした記録は、強固な規則や力関係によらずに、さまざまな人がある活動の流れに引き寄せメタ組織を動かしていくひとつの方法でもあった。

また、第2の情報収集と分析が、LFSにおいても積極的に行われたことは、議事録やニューズレターからもよくわかる。LFSでは、地域での最初の公開集会を開くまでに、ノッティングヒル内での訪問調査を行い、フリー・スクールについて説明すると同時にその反応や意見を聴取し、それをカードに記録し、大学で分析した。また、より効果的に広報活動を行うため、ポスターを街のどこに貼るのか、フライヤーを配布する場所や時間帯 (ラッシュアワー時の駅前など) を観察し検討している²⁸⁾。それでも、LFSの活動は、最初は関係者の思いばかりが先行し利用者のニーズと合わず頓挫し、その後のLFSの活動では、地域のなかでの問題や要望をさらにとりいれていった。

LFSは、情報を伝達するだけでなく、それをどのような「形」にして伝えるか、「見せ方」を工夫した。これが第3の発信とデザインである。たとえば、ポスターやフライヤーやニューズレターの文字のロゴやレイアウトやイラストを意識して作成している。LFSやシンボルとしての記号、IT, UFO, BITといった名称や略称、それを示すデザインも、偶然ではなく、アルファベットの並び方や音の響きやそこで連想される意味が、選ばれて形づくられている。ノッティングヒルのニューズレターの編集には、写真家やグラフィック・デザイナーも参加している。

第4の異なるメディアの組み合わせは、LFSの活動においてとくに注目すべき点である。LFSは自分たちで情報を発信しただけでなく、地域の既存の商業

メディアも有効に活用した。また、こうしたメディアを引き寄せるタイミングが絶妙である。モハメッド・アリをLFSに招き、LFSの存在を地域にアピールし、同時に、ノッティングヒルでのフェスティバルの計画を発表する。翌月には、フェスティバルについての詳細な計画を地方紙に発表し、*The Grove*では、ラスレットがさらにコメント加え詳しく伝えている。地方新聞にとってもLFSは、地域住民が関心をもつネタを提供してくれるひとつの情報源となった。またLFSの関係者も新聞の紙面を利用し、自分たちの活動について地域住民に訴え呼びかけていった。地方2紙はどちらも、「体制からの圧力」に抗するLFSの姿勢に概ね好意的で、LFSは新聞や地域のビジネスともうまくつきあひながら、9月のイベントの準備や資金集めをすすめた。

LFSの短い活動は、ノッティングヒルの暮らしのなかにある特定の問題を解決したわけではない。ノッティングヒルの住民は、モハメッド・アリの訪問やカーニバルといったイベントについては記憶していたとしても、多くの人々はそれらの主催者であったLFSの存在は覚えていないだろう。しかし、1960年代半ばのノッティングヒルにおいて、メディアによる地域の活性化を促したという点では、LFSはコミュニティ活動の1つの方法として先駆的な取り組みであった。

LFSが支援したノッティングヒル・フェスティバルは、地域のストリートを練り歩くパレードだけでなく、地域の各所で、さまざまな音楽や踊り、演劇や詩の朗読、花火やいろいろなアトラクションを織りまぜた²⁹⁾。こうしたイベントの企画は、LFSがオリジナルに発案したのではなく、ラスレットら地域住民が以前から考えていたアイデアを、LFSが引き出しその実現を支援したものであろう³⁰⁾。しかし、LFSが主催者として関わることによって、地域内外のパフォーマーをノッティングヒルに招き、また地域のメディアや住民が注目し話題となることで、より多くの観衆を集めた。LFSがあいだにたって地域が潜在的にもつ文化的要素と人材をひきだし、LFSの関係者が地域外にもつネットワークを活用し1週間にわたるイベントを実施することができた。LFSとは、ホプキンズが言うように固定した組織ではないがゆえに、多様な人々を巻き込み形をかえながらも情報と場所と人をつなぐ地域のひとつの媒体となりえたのである。

おわりに

「アイデア（人々の潜在的な意識）」、「人材（多様な人々のネットワーク）」、「媒体（異なるメディアや資金）」、「場所（多様性が出会うスペース）」が、それぞれ別に存在していてもハプニングは生じない。これらをどのタイミングでつなぎ機能させるのか、その一つの方法が、この論文で述べてきたホプキンズとLFSの情報とメディアの使い方である。ホプキンズはインタビューでは、彼が関わったどの活動についても、自分の功績としては語らない。彼は、「自分はリーダーではなく、オーガナイザー」だといい、「よく観察することだ、人々が何を望んでいるかを。それさえ間違わなければうまくいく」と話した。ホプキンズは、人々が求めているものを形にする最初のアイデアを提示、実践するが、それがある程度、軌道にのると、自身はまた別の活動を始めた。自分が関わった活動が、その後、誰がどのように引き継ぎ展開するかについては深くは関与しない。それでもLFSの名前が消えたあとも、ノッティングヒルでのフェスティバルは毎年開催され、LFSが関わったプロジェクトは、別の組織として地域のなかで継続された³¹⁾。その後の地域の活動において、人々がどのように自分たちのメディアを作り出し、時には商業メディアを利用しながら運動を展開していくかについては、改めて論じたい。

また、1968年2月には、Free University of New YorkをモデルにしたAnti-University of London³²⁾が開設された。*The International Times*, No. 24 (19 January 1968)の紹介記事では、この「大学」では教師と生徒が互いに影響し合う創造的な場を作り出すという発想に基づいている、と述べている。LFSもその2年前に同じ趣旨の活動を試みたが、FUNYの発想をノッティングヒルにおいて実践するなかで、より地域のニーズに応じた活動へと変わっていった。しかし、アンチ・ユニバーシティも、当時の前衛的なアート活動も、ホプキンズが関わったLFSもUFOクラブもITもBITも、それぞれが別のもので存在していたわけではなく、ホプキンズがいう「さまざまな人々が織り成すタペストリー」（人脈）と従来の価値観を打ち破り社会を変えることができると考える時代の空気（時代性）のなかで、つながりながら形を変えて生み出されたものである。1960年代のノッティングヒルの活動を、地域における文脈とグローバルな時代の動きのなかでとらえながら、さらなる調査研究をすすめていきたい。

謝辞

2015年9月、ジョン・ホプキンズのインタビューをまとめた *Grassroots Media Zine3* の英文原稿を抱えて渡英した。1960年代のノッティングヒルの地域活動に携わった方々や、ロンドンでのフィールドワークをとおして長年お世話になっている知人たちに読んでもらった。そこでの議論が、本稿にも深く影響している。Neville Collins, Geneviève Fontier, Beryl Foster, David Mason, Barry Miles, Jan O'Malley, John O'Malley, Adam Ritchie, Tom Vague に心から感謝している。2015年1月30日に亡くなった John 'Hoppy' Hopkins から、私はどれほど多くのことを学んだことか。感謝の気持ちをもう直接には伝えることはできないが、作品を書きながら、メディアワークを実践しながら、ホッピーとの対話を続けていきたい。

注

- 1) John Hopkins は、イギリス、バクシャー県スロー（Slough, Berkshire）出身、高校時代から60年代以降も人々から Hoppy という愛称で親しまれてきた。私がフィールドワークのなかで出会った人々も、彼をホッピーと呼んでいた。LFS 関連の一次資料には、John Hopkins と記されているが、60年代に関する文献には、フルネームではなく Hoppy, あるいは、John 'Hoppy' Hopkins と記されていることがある。
- 2) 2015年度の英米でのフィールドワークの一部は、科学研究費補助金、「多文化社会におけるコミュニティ活動とメディア戦略に関する実践的研究」（基盤研究B, 海外学術調査, 研究代表者西川麦子, 2015-2018年度）を得て行われた。
- 3) マイケル・デ・フレITASは、トリニダード・トバゴ出身、1957年にイギリスに移住し、ノッティングヒルにおいては、悪徳不動産業者として知られるピーター・ラックマン（Peter Rachman, 1919-1962）の元で働いた。1965年は、RAAS（Racial Adjustment Action Society）と呼ばれる黒人政治グループを立ち上げ、人々からはマルコム X にちなんでマイケル X と呼ばれるようになった。Michael Abdul Malik としても知られた（たとえば1968年に出版された自伝の著者名）。トリニダード・トバゴにおいて殺人罪に問われ、1975年に死刑が執行された。
- 4) Housmans Bookshop（5 Caledonian Road, London, N1）は、1945年から営業し、*The Peace News* の発行など、長年にわたり平和運動の拠点にもなってきた。2009年8月12日のイベントでは、ヒストリー・トークのメンバーでもあるトム・ベーク（Tom Vague）が話した。20人ほどの参加者のなかには、ノッティングヒルの地域活動に携わってきた人も含まれ、それぞれの経験をもとに率直な意見が交わされた。LFS は、当時の資料によると1966年3月にハウズマンズで集会を開いているが、そうした記憶について語る人や、その頃のノッティングヒルは、コミュニティ活動、労働者階層の運動、対抗文化的な活動など、多様な活動が入り乱れ互いにうまく関係していなかった、といった発言も飛び出した。
- 5) ジョン・ホプキンズとのインタビューは、ロンドンにある彼の自宅で2009年9月2日、2011年2月19日、25日、7月13日、15日、17日、2014年9月14日に行った。1回2時間から4時間ほどである。また、Eメールをとおしてしてホプキンズが補足説明をしてくれることもあった。パーキンソン病が進行し、メールの文章は短くなったが、ユーモアを忘れず暖かい言葉が添えられていた。
- 6) ホプキンズは、インタビューでは、70年代以降のコミュニティ・ビデオに関する活動についても多く語った。彼は、私のフィールドワークにも関心をもち、互いの方法論の共通点と違いについて話し合った。ホプキンズにとって私は、時には彼のライフストーリーの聞き手であり、時には彼からコミュニティ・メディアについて学ぶ生徒であり、時には互いの方法論について議論する相手でもあった。
- 7) ホプキンズは、60年代以前についてもよく話した。たとえば、自分の母の語りを映像と音声に記録したこと、英領インドで建築家として働いていた祖先が登場するファミリーヒストリー、エンジニアであった父との関係、子供時代の将来の夢、第2次世界大戦後のアメリカ軍の存在とイギリスへの影響、大学時代、卒業後の原子力研究所での就職、仲間とソビエト連邦を旅した話、などである。ホプキンズのファミリーヒストリーや英領インドについての話から、60年代のアンダーグラウンド界のカリスマ的人物が、特異な環境のなかから生まれたのではなく、スチュアート・ホールがいう「1960年代に伝統的な諸階級の間を移動する人々が大勢現れ」（Hall 1996, 小笠原訳1996: 19-20）、ホプキンズもその一人であったことがわかる。
- 8) “John 'Hoppy' Hopkins: Photographer of London's swinging sixties dies”, *The Independent*, 31 January 2015. “John Hopkins: Charismatic photographer, activist and leading figure in London's counterculture of the sixties”, *The Independent*, 3 February 2015. “John 'Hoppy' Hopkins obituary: Photographer, writer and activist was a leading figure of 1960s British counterculture” by Joe Boyd and Val Wilmer, *The Guardian*, 15 February 2015. “John 'Hoppy' Hopkins, photographer-obituary”, *The Telegraph*, 20 February 2015.
- 9) *Grassroots Media Zine* とは、筆者がこれまでに関わってきたイギリス、アメリカにおけるコミュニティ活動に関する調査やメディア実践について記した自主制作雑誌である。フィールドワークをとおして出会った人々の「語り」や資料を英文で記録し、調査協力者や読者と情報を共有、交換するメディアを作りたいと考え、2012年から不定期に発行している。Mugiko Nishikawa が執筆、Thomas Garza が編集している。GMZ3（A4版、70頁）では、John Hopkins を Hoppy と記し、ロンドン・フリー・スクールの活動とホッピーが語る60

- 年代、そしてメディアのホッピー像と現実とのギャップ、などの内容を扱っている。こうした雑誌発行は、コミュニティラジオ番組制作と同様、筆者が英米での調査から学んだ草の根活動におけるメディアの使い方を応用し、自らが実践することをとおしたフィールドワークである。
- 10) Graham Keen は、Green のインタビューのなかで、「ホプキンスがアメリカから持ち帰ったアイデアのひとつは自由学校で、もう1つがアンダーグラウンドの新聞であった」と述べている (Green 1988: 93)
- 11) Michael Horovitz は、Green のインタビューのなかで、「60年代のノッティングヒルとその周辺には、たくさんアーティストが住んでいて、特別に親しいというわけでもないけれど、顔見知りだったり、時にはお茶を飲んで話したり、そんな緩いつながりのコミュニティ (a loose-knit community) があった」と述べ、そうした多くのアーティストの一人に Hoppy の名前をあげている (Green 1988: 14)。
- 12) マイケル・デ・フレITAS は、ホプキンスからの LFS への勧誘の電話の内容や彼のフラットで行われた集まりについて記述している。「ジョン・ホプキンス、ホッピーが、電話のなかで話した参加者の名前には、自分の友人もたくさん含まれていた」、「集会の参加者の議論はおそろしく純粋で情熱的で、その熱気に呑み込まれそうだった」、「私は、地域 (ノッティングヒル) で何が必要とされているかについて話し、彼らの考えていることは興味深くうまくいくと思うと言った」 (Malik 1968: 154-155)。
- 13) ホプキンスは常に、最新のテクノロジーに関心をもった。60年代の彼の話のなかには、自家用車、スクーター、電話といった交通手段、通信機器や、カメラ、プリンター、ビデオカメラといった機材が登場する。カメラは、1958年にケンブリッジ大学の卒業祝いに名親から贈られ使い始め、1960年代にロンドンに来てプロのカメラマンの助手をして仕事を学んだ (Hopkins 2008: 159)。ホプキンスは、1965年7月にニューヨークに滞在するアダム・リッチを訪問した際には、彼の自宅からニューポート・ジャズ・フェスティバルのチケットや航空券を、夜間でも電話で数分のうちに手配することに驚き、強い関心をもった。LFS の議事録やニューズレターにも、ホプキンスの電話の連絡先が記載され、不在の場合はメッセージを残す録音機能を活用している。1967年に Sony がポータブルのビデオレコーダーをヨーロッパで紹介した際にもいち早く目をつけ、1968年には、Sony と直接に交渉し機材を借り、実験的に使いその結果を報告した。
- 14) Trade Unions (Group leader: Marc Kornfeld), Photography (Graham Keen), English general (Irving Fuchs, Havia Alswang), English Language reading, writing (Dave Conroy, Michael de Freitas), Comparative Religion (Pete Figueroa), Law (Lawrence Collins), Music (Dave Tomlin), Housing & Immigration (George Clark, Peter Jenner), Modern History & World Power Structure (Pete Roberts), Play Group for 5-11 years old (Mrs. Laslett), Teenage Group (Mrs. Laslett), Family, Children & Mental Health (Mrs. Laslett, Dr Phil Epstein), Dancing (Sherry Lynton), Current Affairs (Secretary, LFS), Economics (Peter Jenner), Drama (Secretary, LFS)
- 15) LFS や当時の資料には、Rhaune ではなく Rhaunie Laslett, あるいは Mrs. Laslett と記載されている事が多い。「ローン・ラスレットはロンドンに生まれたが母は、ノースカロライナのアメリア・インディアン出身、父はロシア人である」 (Cohen 1993: 10)。ノッティングヒルで地域の活動に携わり、LFS では、自宅で子供のためのクラスを複数担当した。
- 16) *The Gate*, Vol. 1, No. 2 には、デ・フレITAS が、「Gate は、フリー・スクール系の人たちのあいだでは馴染みが深いように、黒人のあいだでは、Grove が自分たちの拠点だ」と記している。
- 17) Courtney Tulloch は、Green のインタビューのなかで「白人のヒッピーたちは、Notting Hill Gate を Gate と呼び、黒人たちにとっての中心は、Ladbroke Grove だった。ホッピーは、黒人たちとのつながりを示すために、雑誌名を *The Grove* に変えた」と述べている (Green 1988: 102)。
- 18) “Clay in Notting Hill, surprise visit to school’s play group”, *The Kensington Post*, 20 May 1966,
- 19) Fayre とは Fair の古英語。
- 20) *The Grove*, Vol. 1, No. 5 には、編集協力者の名前が掲載されている (Soe Harries, Mike McInnenny, Mike Laslett, John Hopkins, Graham Keen, Harvey Matusow, Kate Heliczer, Jean McNeill)。LFS のカメラマンの Keen は、その後 *The International Times* の発行にも関わっている。デザイナーの McInnenny は、後に UFO クラブでもポスター作りを手伝った (Green 1988: 131)。*The Grove* は、レイアウトやイラストを整えた本格的なタウン情報誌をめざしていたと思われるが、*The Grove* が6号以降、発行されたかどうかは、筆者の調査においては不明である。
- 21) 地方新聞には、カーニバルについてだけでなく、LFS のその他の活動やニュースについても掲載されている。“Planned for the autumn... Notting Hill Festival”, *The Kensington Post*, 10 June 1966. “More plans for Notting Hill Festival Week”, *The Kensington Post*, 17 June 1966. “How the people of Notting Hill are brought together”, *the Kensington News*, 24 June 1966. “Pageant and procession at Notting Hill Fayre”, *The Kensington News*, 7 July 1966. “Abandoned cars poll”, *The Kensington News*, 8 July 1966. “Flyover site to be temporary playground”, *The Kensington Post*, 15 July 1966. “Fair will go on as planned say Free School”, *The Kensington News*, 12 August 1966. “Filth, rust and broken bottles where children play”, *The Kensington News*, 26 August 1966. “Funds appeal for fayre”, *The Kensington News*, 26 August 1966. “FESTIVAL WEEK AT NOTTING HILL” *The Kensington Post*, 16 September 1966. “Why no council support?”, *The Kensington*

- News*, 23 September 1966. “Steel band in carnival procession”, *The Kensington News*, 23 September 1966. “Notting Hill’s big carnival”, *The Kensington Post*, 23 September 1966.
- 22) スチュアート・ホールは、筆者とのインタビューのなかでマイケル・デ・フレイタスについてふれ、彼がマイケル X として黒人の政治活動に関わるようになった背景について語っている (GMZ2: 35-36)。LFS の議事録においては、Michael de Freitas はもっともよく発言をしているが、宗教や RAAS に関する内容は見られない。また、Michael Abdul Malik という名前も LFS では使っていない。ホプキンズも、インタビューでは、マイケルは、時には政治的になり、時には宗教的になるが、場面を使い分けており、LFS ではそうしたことは問題にならなかった、と述べている。
- 23) “FAIR WILL GO ON AS PLANNED SAYS FREE SCHOOL”, in *The Kensington News*, August 12, 1966.
- 24) ホプキンズは、ハプニングについて説明するときに、Gustav Metzger (1926-) をはじめとしたアーティストたちが実施した DIAS (The Destruction in Art Symposium) について話した。これは、1966年9月にロンドンのアフリカ・センターで開催されたシンポジウムであり、また、ロンドン各地でアート・イベントが催された。ホプキンズは、DIAS のパフォーマンスや作品も、LFS の活動も偶発性を創造的に活かすという点では、同じ時代の潮流にあると考えていた。
- 25) Green のインタビューにおいてマイルズは、IT の発行部数について、「最初の頃は1万部程度であったが発行部数を増やし、1968年5月が最も多く4万4000部発行した」(Green 1988: 124) と述べている。
- 26) ホプキンズの話では、とくに、1968年5月以降、さまざまな問い合わせが殺到するようになり、IT 事務所の電話が機能しなくなった。質問の内容は、たとえば、「インドを旅するときの宿泊所を教えてください」、「いいライブ (gigs) を紹介して」、などである。
- 27) *The International Times*, No. 33, 14 June 1966. BIT は、情報の共有、分類、蓄積のシステムを作るという点では、1960年代にホプキンズに関わった情報とメディアに関する活動を総括するような内容である。BIT の発想については、GMZ3: 47-55 で詳しく述べている。
- 28) ホプキンズは、*The International Times* においても、ある種のマーケティング・リサーチを行っている。たとえば、定期購読者の登録データを分析して、IT の購読者層とその地理的分布を分析してどこで IT を販売するかなどを検討したとインタビューで話している。
- 29) “Festival Week at Notting Hill” (*The Kensington Post*, 16 September 1966) によると、1966年のフェスティバルは次のような日程である。9月18日(日)午後2時半から、ノッティングヒル内のストリートを練り歩くパレードがある。5つのバンドが演奏し、装飾した車が走り、仮装行列も行われる。午後7時半から国際的な音楽やダンスが披露される。19日(月)7時半からは、オールタイム・ミュージック、20日(火)7時半から演劇、21日(水)7時半からは、サブライズ・スター・アトラクション、22日(木)7時半からは詩とジャズ、23日(金)7時半から合唱、演劇、ダンス、そして7時半からは Destruction in Art Symposium 関連のイベントも開催される。土曜日と日曜日にはジャズ演奏にあわせたダンスもくりだす。こうしたイベントの詳細の連絡先はラスレットとなっている。
- 30) 1960年からノッティングヒルに住み地域での活動をしていたメソジスト教会の牧師 David Mason (1926-) は、2015年9月のインタビューでは、LFS がノッティングヒル・カーニバルを始めたのではなく、LFS が地域活動を始める以前から、ローン・ラスレットが、ノッティングヒルの様々な人々が参加できるカーニバルを実施したいと協力を求めてきた、と話していた。
- 31) たとえば、アダム・リッチは、LFS に関わったことをきっかけに、North Kensington Playspace Group を設立し、1970年代初めまで地域で活動を続けた。
- 32) Anti-University of London は、1968年2月に、49 Rivington Street, E. C. 2 において始まった。精神科医の R. D. Laing, Joe Berke をはじめ、作家、詩人、アーティスト、映画プロデューサーなど、さまざまなジャンルの人々が参加している (*The International Times*, No. 24, 19 January 1968)。Joe (Joseph) Berke は、アメリカ人精神科医で、Allen Krebs らとともに、1965年の Free University of New York の設立に携わった。Berke は、同年9月には、R. D. Laing ら精神科医たちが Kingsley Hall で始めた活動に参加するために、ロンドンに移り住んだ。Berke は、*The Peace News* に FUNY を紹介する記事を掲載し (29 October 1965)、Free University of London の設立を試みたが、当時は実現できなかった (Nuttall 1968: 220-221)。ホプキンズが1965年末に自由学校設立の準備を始めたときは、アメリカの自由大学をめぐる運動が、Berke をはじめとした関係者やメディアをとおして、ロンドンにもさまざまな伝わっており、ニューヨークとロンドン、あるいはアメリカとイギリスにおけるアンダーグラウンドの活動のつながりを知るうえで興味深い。なお、Anti University of London には、Krebs も参加している。

参考文献・資料

参考文献

- Berke, Joseph ed.
 ・1969, *Canter Culture: The Creation of an Alternative Society*, Peter Owen Ltd.
- Boyd, Joe
 ・2006, *White bicycles: making music in the 1960s*, Serpent’s Tail
- Blagrove Jr., Ishmahil ed.
 ・2014, *CARNIVAL: A Photographic and Testimonial History of the Notting Hill Carnival*, Rice N Peas
- Cohen, Abner
 ・1993, *Masquerade politics: explorations in the structure of urban cultural movements*, University of California Press
- Duncan, Andrew

- ・ 1992, *Taking on the Motorway: North Kensington Amenity Trust 21 years*, Kensington and Chelsea Community History Group
- Green, Jonathon
 - ・ 1988, *Days in the life: Voices from the English Underground, 1961-1971*, William Heinemann Ltd
- Hall, Stuart
 - ・ 1996, “The formation of diasporic intellectual: An interview with Stuart Hall by Kuan-Hsing Chen”, in Morley D. and Chen, K., ed., *Stuart Hall: Critical Dialogues in Cultural Studies*, Routledge, pp. 484-503 (小笠原博毅訳「あるディアスポラの知識人の形成」『思想』No. 859, 1996年1月号, pp. 6-30)
- Hopkins, John
 - ・ 2008, *FROM THE HIP: Photographs by JOHN ‘HOPPY’ HOPKINS 1960-66*, Damaiani
- Jenner, Peter.
 - ・ 1966, “The London Free School”, *Resurgence*, Vol. 1, No. 2, July/August, pp. 16-18
- Krebs, Allen
 - ・ 1967, “Universities”, *Treason*, the summer 1967, pp. 1-9
- Malchow, H. L.
 - ・ 2011, *Special Relations: The Americanization of Britain?*, Stanford University Press
- Malik, Michael Abdul
 - ・ 1968, *From Michael De Freitas to Michael X*, Sphere
- Miles, Barry
 - ・ 2002, *In the Sixties*, Pimlico
 - ・ 2010, *London Calling: A Countercultural History of London since 1945*, Atlantic Books
- Miles, Barry ed. Burroughs, William., Hopkins, John., Harwood, Lee.
 - ・ 1965, *Darazt*, Lovebooks
- 西田慎, 梅崎透編著
 - ・ 2015, 『グローバル・ヒストリーとしての「1968年」—世界が揺れた転換点—』ミネルヴァ書房
- 西川麦子
 - ・ 2004, 「ロンドン、ハマースミスにおける1970年代のコミュニティ開発の実験的試み：忘れられたプロジェクトの成功」『甲南大学紀要 文学編131 社会科学特集』pp. 79-108
 - ・ 2007, 「ロンドン、ノッティングヒルにおける1960年代初めのコミュニティ活動の試み：あるメソジスト教会牧師とニュー・レフト活動家の取り組み」『甲南大学紀要文学編146』pp. 39-67
 - ・ 2009, 「ロンドン、ハマースミスにおける住民の活動の場としての『地域』の創出：情報のネットワークと個人の選択を基盤としたレジデント・アソシエーション」『甲南大学紀要文学編156社会科学特集』pp. 145-176
 - ・ 2010, “Creation of ‘Community’ for Residents’ Activities in Hammersmith, London: Residents’ Association Based on Information Network and Individual Choice”『甲南大学紀要文学編』No. 160, pp. 179-197
 - ・ 2012, 「コミュニティラジオをグローバルに開く：アメリカ、イリノイ州、WRFU-LPの日本語番組の試み」『甲南大学紀要文学編』No. 162, pp. 51-68
 - ・ 2013a, 「運動としてのコミュニティ・メディア：アメリカ、イリノイ州、WRFU-LPとグローバルなネットワーク」『甲南大学紀要文学編』No. 162, pp. 133-152
 - ・ 2013b, “A Media Space for Cultural Exchange: Exploring Community Radio in the United State”, Garza, Thomas ed. *Grassroots Media Zine*, 1, pp. 1-18, HarukanaShow org. <http://harukanashow.org/archives/category/zinereport>
 - ・ 2014a, 「地域の多様性をつなぐメディア実践：アメリカ、イリノイ州、アーバナ・シャンペーンのメディア表現者たち」『甲南大学紀要文学編』No. 164, pp. 113-132
 - ・ 2014b, “The Ghost of George Clark: From An Interview With Stuart Hall”, Thomas Garza ed. *Grassroots Media Zine*, 2, pp. 3-44, HarukanaShow org., <http://harukanashow.org/archives/category/zinereport>
 - ・ 2015, 「1960年代、ノッティングヒルの『新しい』コミュニティ活動に関する研究序説：スチュアート・ホールからの問い」『甲南大学紀要文学編』No. 165, pp. 141-157
 - ・ 2016, “John ‘Hoppy’ Hopkins interviews from 2009-2014”, Garza, Thomas ed. *Grassroots Media Zine*, 3, HarukanaShow org. pp. 1-70
- North Kensington Community Archive,
 - ・ 2006, ‘A Guide To The Records: Transferred To The Royal Borough of Kensington And Chelsea Local Studies Libraries April 2006’, HISTORY Talk
- Nuttall, Jeff
 - ・ 1968, *Bomb Culture*, MacGibbon & Kee
- 竹林修一
 - ・ 2014, 『カウンターカルチャーのアメリカ：希望と失望の1960年代』大学教育出版
- Vague, Tom
 - ・ 2009, *50 Years of Carnival 1959-2009*, HISTORY Talk
- Vaughan, Roger
 - ・ 1966, “The anti-university university is the newest meeting place for younger radicals”, *LIFE*, May 20, 1966, pp. 119-120
- Williams, John L.
 - ・ 2008, *Michael X: A Life in Black & White*, Century
- 新聞、雑誌（1960年代）
 - The International Times*
 - ・ “Anti-University announces course”, *International Times*, No. 24, 19 January 1968: http://www.internationaltimes.it/archive/index.php?year=1968&volume=IT-Volume-1&issue=24&item=IT_1968-01-19_B-IT-Volume-1_Iss-24_003
 - ・ “bit”, by John Hopkins, *International Times*, No. 33, 14 June 1968, http://www.internationaltimes.it/archive/index.php?year=1968&volume=IT-Volume-1&issue=33&item=IT_1968-06-14_B-IT-Volume-1_Iss-33_019

The Kensington News

- ・ “How the people of Notting Hill are brought together”, 24 June 1966
- ・ “Pageant and procession at Notting Hill Fayre”, 7 July 1966
- ・ “Abandoned cars poll”, 8 July 1966
- ・ “Fair will go on as planned say Free School”, 12 August 1966
- ・ “Filth, rust and broken bottles where children play”, 26 August 1966
- ・ “Funds appeal for fayre”, 26 August 1966
- ・ “Why no council support?”, 23 September 1966
- ・ “Steel band in carnival procession”, 23 September 1966,

The Kensington Post

- ・ “Clay in Notting Hill, surprise visit to school’s play group”, 20 May 1966
- ・ “Planned for the autumn . . . Notting Hill Festival”, 10 June 1966
- ・ “More plans for Notting Hill Festival Week”, 17 June 1966
- ・ “Flyover site to be temporary playground”, 15 July 1966,
- ・ “FESTIVAL WEEK AT NOTTING HILL”, 16 September 1966
- ・ “Notting Hill’s big carnival”, 23 September 1966

The Peace News

- ・ “The Free University of New York” by Berke, Joseph, 29 October 1965

新聞 (John Hopkins 追悼記事)

- ・ “John ‘Hoppy’ Hopkins: Photographer of London’s swinging sixties dies”, *The Independent*, 31 January 2015: <http://www.independent.co.uk/news/people/john-hoppy-hopkins-photographer-of-londons-swinging-sixties-dies-10015399.html>
- ・ “John Hopkins: Charismatic photographer, activist and leading figure in London’s counterculture of the sixties” *The Independent*, 3 February 2015: <http://www.independent.co.uk/news/people/news/john-hopkins-charismatic-photographer-activist-and-leading-figure-in-londons-counterculture-of-the-sixties-10021833.html>
- ・ “John ‘Hoppy’ Hopkins obituary: Photographer, writer and activist was a leading figure of 1960s British counterculture” by Boyd, Joe, Wilmer, Val, *The Guardian*, 15 February 2015: <http://www.theguardian.com/artanddesign/2015/feb/15/john-hoppy-hopkins>

- ・ “John ‘Hoppy’ Hopkins, photographer-obituary”, *The Telegraph*, 20 February 2015: <http://www.telegraph.co.uk/news/obituaries/11389353/John-Hoppy-Hopkins-photographer-obituary.html>

一次資料

Bit

- ・ “The Invitation letter to the party 8 August 1968 by Bit”, dated 26 July and 5 August 1968

London Free School

- ・ “London Free School meeting 5”, 25 January 1966
- ・ “London Free School meeting 6”, 8 February 1966
- ・ “London Free School meeting 7”, 15 February 1966
- ・ “London Free School” (flyer for the first public meeting), March 1966
- ・ “IMPORTANT THAT YOU READ THIS CAREFULLY from John Hopkins”, 9 March 1966
- ・ *The Gate*, Vol. 1, No. 1, 4 April, 1966
- ・ *The Gate*, Vol. 1, No. 2, 21 April, 1966
- ・ *The Grove*, Vol. 1, No. 4, 23 May 1966
- ・ *The Grove*, Vol. 1, No. 5, 23 June 1966

North Kensington Playspace Group

- ・ “North Kensington Playspace Group: a scheme of amenities, play facilities, and open space for North Kensington” (pamphlet), 1967/68

DVD

Gammond, Stephen (director)

- ・ 2008, *A Technicolor Dream*, Eagle Rock Entertainment Ltd.

URL

- ・ Antihistory: <http://files.antihistory.org/Anti-Tabloid.pdf>
- ・ Harukana Show: <http://harukanashow.org/>
- ・ Housmans: <http://www.housmans.com>
- ・ Housmans Bookshop, “Tom Vague: The London Free School 1966-68”: <https://www.youtube.com/playlist?list=PLA4F14143E673CA8B>
- ・ International Times Archives: <http://www.internationaltimes.it/archive/>
- ・ LEXI Cinema: <https://thelexicinema.co.uk>
- ・ TATE: <http://www.tate.org.uk>
- ・ VAGUE: <http://tomvague.co.uk>

最終アクセス：2016年1月2日